The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	精神の他者性と絶対性 : シェリングからヘーゲルに到る途上の七つの歩み
Author(s)	ヘンリッヒ, ディーター
Citation	哲学論叢. 1979, 5, p. 1-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66762
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

精神の他者性と絶対性

——シェリングからヘーゲルに到る途上の七つの歩み——

ディーター・ヘンリッヒ
大野篤一郎訳

以下において、全く異った種類の二つの問題が探究されるが、しかし、それは唯一つの思考のつながりを展開するという形で行われる。一つの問題は歴史的な性質を持ち、他の問題は、哲学者達があらゆる事物の究極の原理について反省するものだとすれば、パルメニデスによって展開された、このような思想の最も古い観点において、提出される。

ヘーゲルは、その高度の複雑化と概念構成の技術によって、しかしまた、その独特の形式によって、際立った一つの哲学体系を作り上げた。それは、最も簡単で、形式的な、関係理論的ともいえる事態から出発しようとする。そのような事態から直線的発展をたどって、それ以上のデータや前提をいわば外から加えないで、あらゆる形式的事態の連鎖が組み立てられ、最後に、あらゆる、凡そ考えられうる事態の総体が、——それはすべての他の事態を包含しているが、——展開されることになっている。この総体について、それは、あの始元や系列と同一であり、凡そ考えられ、また現実的であると考えられる一切のものが、それに尽くされているといわれる筈である。この総体は、それ故、

われわれの認識にとってだけでなく、それ自身において、一つの結果であるが、しかし、それにも拘らず、最初の現実、唯一つのどこまでも自立的な現実である。ヘーゲルがこの現実をいい表わそうとする、多くの標題の中には、それは「全体」である、「絶対者」である、かかるものとして「主体」であるとか、「精神」であるとかいう表現が見出される。それは全体であり、内的に、最も単純な事態から生じるが故に、それは思惟に対しても自ら開示されている。それ故、哲学は、確かに困難な道を通って、絶対者そのものに固有な形式的発展過程を反省するようにさせられるならば、絶対者の認識に到達するのに、それ以上の分析的批判的準備を必要としないのである。

われわれは数年前から、ヘーゲルがこの彼に特有な体系の基本モデルを、イェーナにおける私講師時代に作り上げたことを知っている。それに先立って一連の体系構想があったが、その根底に置かれたのは、哲学的認識の本質についての別の考え方であり、それは絶対者の究極の現実についても、イェーナ時代とは違った捉え方をしていた。それらの構想においては、そこでは現実についての完結した言明も総じて得られる同じ次元において形式的対象の展開から始まる、後の「論理学」は、まだ、有限な思惟形式を破壊することによって、絶対的認識を準備することを目的とする、単に序論的で、専ら批判的な学問であると考えられている。本来の認識、即ち、形而上学的な認識においては、絶対者の定義は、「精神」についての主張を展開することによって、ヘーゲルがイェーナでの最後の学期に初めて講述した体系に特徴的な仕方では、まだ与えられていない。

この体系に到るいくつかの変遷の理由については、これまでにかなり多くの考察がなされて来た。以下において、私は、ヘーゲルの思想上の発展におけるこの歴史的問題は、事柄に即した展開を、しかも思弁論理的な首尾一貫性を充分はっきりと見るならば、大部分解明可能であるということを示したいと思う。その事柄に即した展開は、有限で

限られた現実の概念と、初めにはまだ全く不明瞭に「絶対者」であると考えられた現実との間を支配している関係をどう捉えるかに関わっている。その際、シェリングが、ヘーゲルの私講師就任当時に既に仕上げていたこの関係についての考え方から出発することは許されるし、また出発しなければならない。このシェリングの考え方にヘーゲルは同意したのである。確かに、弟子のように言葉通りにではなくて、独自に手を加えた上ではあるが、しかし、原則的な点では異議を唱えることなく。形式的な相互関係を展開する際の独特の思考力と、歴史における世界状態や発展根拠の形式についての、彼のより以前の分析において到達した結果とによって、ヘーゲルは、シェリングがその考え方を述べた概念形式を更に発展させ、一つの新しい概念形式へと導くことができたのである。この新しい概念形式はまた、全体としての体系の構想をも変えることを必要にした。こうして、ヘーゲルだけが企て、実現することができた体系形式が成立した。そしてそれ故にのみ、ヘーゲルの哲学上の発展に内在し、全くかかるものとして、非常に限られた関心にのみ値する諸根拠について理解することは、もう一つの関心を惹きつけるに違いない。それは、その本性上哲学的であり、全く哲学な思惟からのみ生じ、あるいはは、哲学的思惟から構成される一つの形而上学に対する関心である。

「一元論」とは、唯一の、全く独立の現実のみを認めようとする哲学上の立場であるとしよう。有限者は、それが空間と時間において限られた存在を持ち、そこでは可能なもののうちの僅かなもののみが実現されており、他の現実的なものから生じるということによってだけ制限されているのではない。この、即自的に既に制限された現実も、一元論にとっては、更に全く別の、もっと根本的な意味において、有限者は全く、それ自身において非自立的に、唯一つ自ら本来的に現実的であるものと関係しているということに依存している。その限りにおいて、有限者は、絶対者

の働きとしてのみ、絶対者の中にあるものとして、あるいは絶対者の無限な本質の様態としてのみ現実的であるということができる。単なるプログラムとしては、一元論は、エレア派の人々によって解明された。スピノザはそれを、近世の形而上学によって前以って与えられた概念言語を用いて、初めて、具体的な世界解釈へと完成することができた。スピノザの名において、ヤコービは一元論を先験哲学に対しても、唯一なお可能なプログラムとして課したのである。十九世紀の最初の十年間に、更に、いくつかの一元論的体系が成立したが、それらは、先験哲学の概念構成に基いて、一元論の根本概念を先ず独立の形式的存在論へ、更に一つの世界観へと仕上げることを可能にする概念形式を展開しようと努力するのである。その世界観は、われわれによく知られている現実を、自然言語や科学の記述や、日常的世界観や歴史的宗教の先入見から出発する伝統的形而上学の記述よりももっと巧みに解釈することを可能にする筈である。一元論が開く展望や、それが投げかける問題を、それに適した場所で研究しようとする者は、今日でもなお、この世紀の諸体系、即ち、フィヒテの後期の知識学、シェリングの一八〇一年の体系、そしてそれ自身形而上学であるところのヘーゲルの思弁的論理学と取り組まねばならない。

一元論は、世界の自然な理解が、多くの個別や、それらの間に成り立つ関係にかかわる際に用いるいくつかの前提に対する理論的抵抗という形でのみ展開されうる。それは、このような個別の間に、われわれが差し当り常にそこから出発するような、根本的区別が実際に存在することを否定するのである。その限り、一元論は、真理を目指す修正の企てである。この企てに一致するのが、その立場を最も明瞭にいい表わす、「一にして一切」(En-panta) という定式であり、合い言葉である。「全一者」(das All-Eine)が考えられねばならず、従って、一切が一にして唯一の現実の中に存立する際の特殊な形式の統一が考えられねばならないというのである。

この定式は自然的世界観の修正にとってだけ指導的観点を定立するのではない。それは一元論的体系の構成にとっても、欠くべからざる方法上の指針を与える。この定式は、単に有限なものの現実性に対する間違った確信を捨てるように強いるのと同様に、すべての一元論の展開のその後に経過においても、唯一の現実の中での有限者の内在が、完全に首尾一貫して考え抜かれ、固持されないような、どんな形の一元論的概念構成に対しても対立させられることができる。この定式が、それ自身において複雑な自然的世界像に対して、全く単純であるが、しかしまた全く根本的な対立場として対立させられるのと同様に、それは、同時に、一元論的企てが仮定されることから生じる概念構成を強いて、ますます複雑化の度を増すようにするのである。しかし、まさに、一元論がこの構成的衝動に従うことによって、それは、その世界観を、自然的世界観と競争可能であるような立場にもたらすことができるのである。この定式自身は、自然な思考の観点からは、パラドックスであるように見えざるをえないから、この定式の実現や実現の諸段階も、一見パラドックスであるように見えるであろう。しかも、一元論が、パラドクシカルな全一者の定式から帰結が引き出され、まさにそれと共に、首尾一貫した、世界の現実の複雑化に一致する概念形式や世界解釈が得られたと主張できるようになるまでは、そう見えるであろう。

このようにして、一元論的に捉えられた絶対者についての、シェリングの概念構成もまた既に成立した。それはヘーゲルの独自の発展に対する出発点を印しづけるが故に、前以ってその概要が展開されなければならない。全一者の定式においては、唯一性としての単一性が支配的である。何故なら、その定式は、個々の有限者の間の相違はわれわれの対象との関係の確固とした出発点ではなくて、むしろ根拠薄弱な出発点であると考えるように要求する。絶対者は先ず、すべての存在者の区別が絶対者から遠ざけられるだけでなく、厳密な意味において否定されることによって、

その自己充足性において考えられる。絶対者の他には何も独立の存立を持たず、従って、一切の現実的なものが、結局、同一の現実において、あるいはその「中」にあり、この意味において、同じである限り、絶対者は絶対的である。その限りにおいて、絶対者は絶対的同一性であると記述することができる。

このことによって、全一者の定式における「一者」の優位は満足させられた。しかし、この定式のいわんとするところは、多はもはや全く問題にされないということではない。むしろ反対に、それがいわんとするところは、一者の中の多を、その究極の現実性に関しては同一であると理解することである。一者は唯一者であるだけでなく、それが自己の中に含むものに関しては、まさに、自然な世界像が測り知れない多として前提しているものである。即ち、一者は一切(Alles)である。多そのものに関する限り、多が一者の「中」には存在しないと考えられる限り、多の間に成り立つ「無差別」のために、この一者の同一性は「総体性」であると考えられる。

同一性、無差別、総体性は、それ故、それとの関係において一者の統一性が同一性として定義されるところの多様もまた考えられるのでなければ、無意味な表現である。こうして絶対者の概念が現実の本来の形式としての差別を否定することとは無関係に、この差別は、にも拘らず、絶対者の概念の中に取り入れられなければならない。しかも、それは、絶対者の競争するもののない唯一性がその唯一、独立の存立を持つ限りにおいてのみ存立する差別の概念として、絶対者の概念の中に取り入れられなければならない。

シェリングは、絶対者の中での有限な個別の内在を言語によって把握するのに役立つ一連の概念の組みを使用する。例えば、絶対者は、特殊化が、それにつけ加わるのでなくて、内在する「普遍」である。あるいは、それは、有限者の限界がその中に印しづけられ、従って、それ自身、有限者の中に現前している「無限者」である。あるいはまた、

それは、すべての概念的区別を担うところの「直観」である。あるいはまた、それは、その形式のいろいろな相違においても実現されている本質である。これらすべての表現がいわんとするところは、有限者の中の差別は根本的ではなく、単に徹底的に派生的であるということであり、有限者は全く絶対者の力によってのみ、従って、絶対者の中に存立するということである。

さて、しかし、シェリングは、この一元論の根本定理を更に変化させたが、そこから先ず彼に特徴的な体系形式が生じ、次にしかし、それはヘーゲルの体系構想に導く概念展開のための出発点となるのである。一元論的動機の歴史を見るならば、それはプラトンの根本概念を一元論の枠の中で統合することであるということができる。一元論は、絶対者の他に個別が、それ故、根本的に非自立的な個別が一体存在するかどうか、それとも、一切の個別は単に絶対者の性質、もしくは状態の如きものであるのかどうかという問いに対して、明白な答えを与えなければならない。一元論が個別を絶対者の属性や様態であると考えるならば、それは現実の世界を解釈するに当って困難に陥るし、それが個別をなんらか有限な意味で自立的であると考えると、直ちに、それでは、一体、どのような仕方で、なお全一者の現実独占が存続しうるのかという問いがでてくる。一元論者としては初めて、シェリングは、全一性が自然的世界に対して批判的に向けられた概念であるだけでなく、絶対者自身から世界を記述する基礎である基礎であることを欲する限り、全一者の定式から得られうる帰結に従ったのである。即ち、いくつかの概念上の根拠からして、一者において総じて同一性の性質を共有するところの多が存在しなければならないという帰結である。しかし、それではどのようにして、一者の中での多の存在がなお主張され、理解されることができるか。

シェリングは、驚くべき仕方で、絶対者の独占と個別の存在とを一緒に考える、差し当り二つの推論によって、こ

の問いに答える。絶対者自身の概念の中で一緒に考えられる個別は、それ自身絶対性の性格を示す場合にのみ、絶対者自身から何らかの仕方で実在的に異ることはありえない。しかし、絶対性の性格は全一性であり、従って、すべての有限者はそれ自身の仕方において既に現実の全体でなければならない。即ち、有限者もそれ自身において総体性である。しかし、同時に絶対者と一緒に仮定されている有限者の差別が考えられねばならないから、この差別は今やもはや、一定の有限者が示す諸性質によって際立せられるのではなくて、これらの性質の配分の仕方によってのみ際立たせられることが可能である。総じて総体的であり、その限り絶対性でもある有限者の間の差別はすべて、量的差別に過ぎない。

このことによって、第一の意味において、プラトンを一元論的枠の中へ組み込むための基礎が置かれた。即ち、すべての有限者が、ある観点と強調において、全体であるとすれば、すべての有限者において絶対者が現象しているということができる。そして更に、この有限者は、そのイデーに関しては絶対者の概念の中に含まれており、従って、唯一の絶対者は同時に有限者のイデーの全体であるということができる。

勿論、プラトン的な意味で「イデー」が考えられる場合には、「現象」は、全く別の意味で、問題になる。即ち、絶対者の顕示としてだけでなく、有限な現象が絶対者自身の背後に本質的に残っている限りにおいても、「現象」は問題になる。このプラトン的動機も取り入れられると、確かに有限者はなお遥かに広い意味において、存在論的に確証される。そして、シェリングの立場にとって特徴的なことは、彼がこの確証をも絶対者についての議論の意味から導き出すということである。彼の推論は、それ自身既に総体性であるという有限者の性格に密接に結びつく考慮から生じる。即ち、有限者が総体性であり、全一者がその唯一性と、従って自己充足性とによって、総体性であるという

性質を持つとすれば、絶対者を表現する限り、有限者は、その総体性によって、自己充足性を持たねばならない。しかし、そうすると、有限者は、絶対者に徹底的に依存しているけれども、その限り、それ自身自立的なものである。無限者が存在し、有限者は無限者に全く属しているが故に、まさにその故に、この有限者は自立的である。こういう訳で、シェリングは、有限者はその自立的存在によって、絶対性の形式をもそれ自身において表現しなければならぬが故に、絶対者の中の自分のイデーを分有するのだ、ということができるのである。この考え方によって、一元論は、有限者の存立そのものを否定しなければならないという危険に対して身を守ったのである。一元論は普遍主義に変貌した。即ち、有限者の自立性は直接に絶対者に基けられている。そして、絶対者の中での内在という意味は、有限者に関しては、更にその自立性をも含むのである。

この結果は全一者の定式から導き出されたが、まさにこのことによって、それは、一つの存在論の構成原理であるという能力を証明する。しかし、既に明らかなことは、事はそれで済んではいないということである。既にいわれたように、全一者というプログラム定式は、その適用の先行段階で到達された推論の結果に、その都度新たに適用されることによって初めて、普遍的存在論のための構成原理になるのである。その定式は、先立つ適用から結果する概念形式が、しかし、まさに、あのプログラム定式自身の含意と結びつけられねばならない場合にはいつも、もう一度適用されなければならない。この定式の適用を繰り返すのに、この場合は特によい機会である。全一性の原理が、しかし、何より先ず要求しているのは、差別は一者の中でのみ生じるということである。さて、しかし、この原理は原理で、差別が一者に対する差別としても認められる場合にのみ考えられる差別を、結果として持つように見える。即ち、有限者が自立的であり、一者の絶対性を形成するところのこの自立性を持つとすれば、有限者は絶対者に対しても自

立的であるように思われる。そしてこのことによって、この絶対者は全一者ではない。

それ故、凡そそれ自身の論理的展開に耐える一元論があるとすれば、それは、有限者の自立性が決定的自立性ではない場合のみである。全一性が仮定されるならば、有限者は自立的なものとして定立され、それと一致して、その自立性において止揚されてもいなければならない。それ故、絶対者は、初めから、有限者に対して二重に関係していると考えられる。即ち、同一の原理からして、絶対者は有限者に自立性を与えるが、その自立性はしかし、同様に徹底的に脱落しなければならない。有限者が、イデーとして、また自立的個別として、絶対者の中で二重生活を持つのと同様に、絶対者も有限者に対して二重の関係を持つ。即ち、絶対者は有限者に関して、構成であると同時に止揚であり、定立であると同時に否定である。

一元論は、このような言表と共に、既にヘーゲルの思惟の試みの引力圏に入り込んだかのような印象が生じるかもしれない。実際、このような言表はヘーゲルによる一元論のより以上の展開にとっても出発点であった。しかしながら、このような言表は、シェリング自身の構想の中で難なく到達され、しかもそれは、シェリングの体系の形式と到達範囲とを印しづける限界線である。即ち、プラトン主義と全一論との独特の統合は、有限者に対する絶対者の二重の関係を仮定する歩みを超えてのみ、満足すべき終結に到達することができるのである。

このことによって更にまた明らかになるのは、シェリングに対して後にヘーゲル主義者から出された、彼は空虚な実体、不動の存在、ロゴスを持たぬ絶対者しか知らないという非難は、彼自身によって仕上げられた体系構想においては全く的はずれであり、何の権利根拠をも持たないと彼に思わせることができた手段をシェリングは持っていたということである。確かに、シェリングがどのような仕方で発展と認識の事実を彼の全一者の考え方の中にはめ込むこ

とができたのかを、ここで明らかにすることはできない。しかし、彼が、この考え方がこのような課題のために何故挫折するのかということを予測しなかったということは、この考え方が絶対者の有限者に対する二重の関係に基いていたということを理解すれば、理解できるであろう。この二重の関係においては、「過程」と「生産」とは、有限者が絶対者から出て、それへと戻る仕方を形づくっている。そして、「精神的」諸関係とは、そこでは全一者の統一性が、有限者の量的差別に対しても、また相対的自立性に対しても優位を顕示している関係である。シェリングの総体性は、その限りにおいて、それ自身において動的である。確かに、シェリングは、これらの動きを、それが無時間的で抵抗なしにそれ自身において生じるかのように叙述している。そして、このことは彼の思弁のプラトン的な根と同様、スピノザ主義的な根にも一致している。このような叙述において、容易にヘーゲルの語り口や自己叙述に対する区別が認められるであろう。この区別に、しかしまた、理論の基礎や絶対者の概念における相違が対応しているかどうか、また、このような区別がいつ頃生じたかは、先ず今後、決定されなければならない。

ヘーゲルのイェーナ時代の初めの著作においては、絶対者の有限者に対する二重の関係は、思弁的理論の中心的動機とされる。この二重の関係がこれほど際立った位置を占めているということは、大部分、ヘーゲルが論理学を絶対者の本来の理論のための序論的科学として構想していることから説明される。この論理学は周知の如く先ず批判的な課題を持っている。即ち、絶対者の中に置かれている純粋な関係についてのいろんな考え方を、全く有限性そのものに定位した思惟は、事柄の性質上、それらの関係の中に実際に置かれた、有限性という様相に固定する。ヘーゲルが「反省」と呼ぶ、このような思惟は、プラトン的な意味において、真理を模倣し、同時に、有限な個別を切り離そうとする傾向によって、真理を覆いかくすのである。こうして、その制限の中で固定された個物は、真理がそれ自身に

おいて現われうるためには、批判論理的思惟の中で止揚され、撓無されなければならない。

ここでは有限性の止揚は、哲学的認識の成果であって、絶対者自身の中に成り立つ関係ではない。しかし、ヘーゲルは、このような関係が、単に認識的批判的な意味において、哲学としての論理学によって作り出されるだけでなく、絶対者自身の中でも前提されなければならないということを前提している。哲学的思惟における有限性の止揚は、一切の有限性がそれ自身において定立されているだけでなく、同様にまた絶対者の中へ取り戻されているが故に、まさにそれ故に、可能なのである。

絶対者が、その概念と共に定立された有限者に対して否定的に関係するという思想と結びついて、今や哲学的思弁におけるヘーゲル独自の展開が始まる。その思想は、この後に続くことになっている考察にとっても決定的な出発点である。という訳は、哲学におけるヘーゲルの成熟期の立場、彼の体系の形式、論理学の新しい構想、彼に固有の、精神としての絶対者という根本概念も、同じように、この発端から展開されるのであるが、それは、充分な理由で、一つの複雑な問題状況の中で生じうるいくつかの理論的観点としてだけでなく、一直線の論究において生じるいくつかの帰結として、展開されるのである。この論究は連続した七つの段階に分けられる。

この論究が、この順序で展開される前に、解釈の方法に対する説明的な注が必要である。即ち、ヘーゲルにのみ独特な哲学をシェリングの諸前提から導き出すことが、どのようにして可能であるかを示すことによって、次のように主張されてはならない。即ち、ヘーゲルの思惟における歴史的発展は、ヘーゲルが、前以って絶対者の概念の分析に集中した注意深さによって、この分析の際に彼に明らかになったいくつかの洞察の順序通りに、彼の体系を仕上げ、組織したことから説明されるなどと主張されてはならないのである。ヘーゲルの発展過程における根本動機の実際の

結びつきを明らかにするという課題は、確かに複雑であり、余りに複雑であって、ここで着手することはできない。しかしながら、ヘーゲルの立場をシェリングの立場からのより以上の発展から導き出すことは、実際の歴史的発展の代りに論理的構成を置くこと以上のことを生ぜしめる。即ち、絶対者の思弁的把握における進展は、全体としての体系構想におけるいくつかのずれとは別に生じ、それらとは区別さるべき研究においては確かに明らかにはならないが、しかし、それらの研究が、ヘーゲルの独特の概念形式の展開の諸段階に対応しているということは示すことができる。それ故、少くとも主張されねばならないのは、絶対者の概念とその展開の諸段階とが、ヘーゲルが自分の最終的体系を目指して歩んだ実際の道の中に入り込んだのは、それらが区別可能ないくつかの段階をへて、後の「論理学」の概念形式へと発展した思弁的論理学の言語の形成条件と切り離し得ないからであるということである。ヘーゲルの哲学上の長所は、いずれにしても、理論的概念そのものを記述したり、よく考えたり、構想したりする点にはなかった。彼は思弁的な思惟形象を考えることはできたが、その構造の諸要素を互に区別して述べたり、そのようにして形象を明確にすることはできなかった。基礎づけの問題においても、彼の思惟は、彼がその後に主張した意味において、具体的であったので、存在論的概念の形式的関係を明確にすることの中にいわば没頭しており、従って、ヘーゲルは、理論的構想を常に、それを実現する場合に結びつけられている形式的関係に関してのみ、論じたのである。それ故、全一論のプログラム定式を展開する際のいろいろな変更は、先ず、一元論のプログラムを実現可能にする、概念形式の側での変更に影響すると期待せねばならない。ヘーゲルが、絶対者はそれ自身精神であるという考え方への決定的な歩みをしたのは、彼が有限者は自己自身との関係において他者であるという考えに到達することによってであったということが明らかにされるであろう。

定立と止揚という二重の関係にある絶対者の概念を、精神としての絶対者の概念へと変えて行く、思弁的思惟の歩みにおける七つの段階は、すべて、シェリングの思想が全一者の原理から有限者の相対的であると同時に止揚された自立性へと到達したのと全く同じ仕方で生じる。即ち、一元論のプログラム定式を、絶対的一者の概念の明確化のその都度到達された現状に繰り返し適用することによって生じるのである。

一　第一段階は、絶対者が、それと共に定立された有限者の自立性を同時にまた終らせ、撓無する過程を一体どのように考えたらよいかという問いから、出て来る。有限者を定立することは、場合によっては、絶対者が自己自身とのみ関係させられている過程であると解されるかもしれない。絶対者が自己自身を満足させていること、従ってあらゆる関係において、自己自身とのみ関係していることは、一元論的絶対者にとって根本的な性格の一つである。シェリングとヘーゲルとは、この性格に対して、一致して、「自己との同一性」という表現を用いた。絶対者は恐らく、この自己自身とのみの同一性において、それ故、それ自身の概念から、その中に含まれた有限者を解離する。しかし、絶対者が、この有限者との関係において、更に止揚と否定であると考えられるならば、この関係は、外的なものに関係させられていることだけでなくて、外的なものと能動的に関係することをさえ含意している。何故なら、この否定は、絶対者から解離された有限者に対する絶対者の働きとしてのみ考えられうるように見えるからである。

この考えに対して、しかし、一元論の原理が適用されねばならない。その原理は、この新たな使用の状況において、有限者の否定を、有限者に対する絶対者の外的な働きとしてではなく、別の仕方で捉えることを要求する。有限者に対して、ヘーゲルは次第に、概念構成におけるいくつかの処置を通じて配慮をする。先ず、彼は、有限者の否定は、絶対者から直接に生じるのではなくて、止揚さるべき有限者の有限な対立物によって、それ故、いわば媒介的に、代

理的に生じるのだと仮定する。有限者が止揚さるべきものである限り、すべての有限者に関して、必然的にこのような対立物が考えられる。有限性の次元は、相関者の差別の次元であるということは、既にシェリングによっても仮定されていた。この差別は、しかし、必ずしも、差別は相互的止揚の関係にあるというように考えられる必要はない。ヘーゲルの歩みによって、相違するものの非同一性は初めて、不両立性へとずらされ、尖鋭化されるのである。

二　これによって、第二の段階が既に用意されている。有限者が論理的相関者によって止揚されるとすれば、絶対者は、有限者の否定が成り立つために、この有限者に対立する必要はない。有限者自身の有限な相関者が、有限者の自立性が止揚されることに責任がある。それは確かに絶対者の力によって起る止揚であって、絶対者自身によって起る止揚ではない。しかし、にも拘らず、有限者が有限者に加える止揚は依然として外的な止揚であった。そして、その止揚は交互に生じるから、それは先ず、その止揚から再び、有限者の永遠の再生もまた生じるというように考えられる。何故ならば、あるものが外的に止揚されうるためには、このような止揚を行う他者が存在しなければならず、この他者もまた止揚されるとすれば、それはその相関者によってであり、従ってこの相関者が前以って再生されていなければならないからである。こうして、有限者は、一度絶対者から分離されながら、絶対者の玉座の前で永遠に演じられる、交互の否定と交互の再生という演劇に巻き込まれ、絶対者はこうして、（観客として）それ自身また、依然として有限者に対して外的な関係にあるであろう。まさに、有限者の止揚の責任が有限者に転化されなければならなかったが故に、絶対者における有限者の絶対的否定は考えられなくなったのだと結論することができよう。

しかし、この結論に反論するには、絶対者の力によって定立された有限者という考えと同時に、有限者が絶対者の中で止揚されているという考えも既に定立されているということにもっと厳密に固執しさえすればよい。有限者が止

揚されているということは、それ故、有限者の存在を左右するところの一種の活動の結果であると考えられる必要はないであろう。有限者が止揚さるべきだということは、それが定立されていることと同様、有限者自身の概念に属している。その限り、有限者は、止揚されることによって、絶対者との新しい関係に入るように強いられるのではない。確かに、有限者は止揚されるが、しかし決して外的にではない。絶対者によってでもなければ、その対立物によってでもない。では一体どのようにして止揚されるのか。この問いが不可避であるという印象の下でヘーゲルがとった、多くのことを決定する転換は、次のような教示へと導く。即ち、有限者は自己自身によって止揚される。すべての有限者は、自己自身に対して否定的に関わるというように、初めから理解されなければならない。それが有限であるのは、まさに、ヘーゲルが後にいい表わすように、それが、その限界、その終り、それによって止揚されるものを、自己の中に持っているからである。有限者は、何よりも先ず自己自身を通じて否定に近づく限りにおいてのみ、否定されうる。

三　この思索と直接に結びついて、第三の歩みがなされる。それは、有限者の自己止揚という考えから、全く全一性の原理に従って考えられる絶対者の概念のために生じるいくつかの帰結を堅持するだけである。この概念から先ず、有限者の自立性と、この有限者も絶対者の中で止揚されているということが帰結した。しかし、この二重の関係によって絶対者の絶対性が危くされるように思われた。しかし、有限者の止揚が、この有限者の自己自身に対する否定的関係から理解されうるとすれば、相違するものが絶対者の中でのみ生じるとする一元論的原理は新しい意味を獲得する。即ち、有限者が絶対者によって止揚され、この止揚は、有限者が自己自身に対して否定的に関わることによって実現されるとすれば、更にいわねばならないことは、絶対者は、有限者の自己否定とその相関者への内的変換によっ

て、有限者の中に現前しているということである。従って、有限者の自己止揚は、絶対者による有限者の止揚が生じる仕方に過ぎない。全一性の原理が妥当するならば、絶対者の側での有限者の止揚は、有限者の自己自身による止揚と、実際には全く異らない。しかし、そうすると、絶対者は、有限者が自己を否定する限り、有限者自身の中に「働いて」いるのである。

四　この言表から第四の歩みを始めることができる。絶対者はかかるものとして自己との同一性であり、純粋の自己関係である。その上、それは、有限者が自己自身に対してあるところの否定的関係であると考えられる。この絶対者の有限者における現在はどのようにしてもっと詳細に捉えられうるかを問うならば、先ず、有限者の自己止揚は、自己関係である絶対者の根本構造が有限者自身の本性の中でも発揮されることから生じるのだと推測することができよう。有限者は、それを絶対者に等しくさせるところの自立性にも拘らず、有限者としては、絶対者ではないものであり、従って絶対者に対して否定的に規定されている。さて、有限者の否定的本性が、自己自身に対しても否定的に関わることによって、絶対者の自己との同一性に影響されるとすれば、それによって、有限者に対して、しかし有限者自身の中から、絶対者の優位が再び回復されているのである。

しかしこのモデルにおいて、今やもはや絶対者自身が否定的側面を持つということは堅持されない。絶対者は、先に絶対者の中から出て来た否定的なものを、絶対者の自己自身との同一性の中に移し変え、それによって、否定的本性が自己止揚になるように、否定的本性を自己関係的にするところのものであると僅かに考えられている。この自己関係が否定的自己関係であるということは、その際しかし有限者の性質とされていて、絶対者の性質にされていない。けれども、この反対のことが思想の発端においては要求されていた。更に、もっと重要なことは、有限者の有限な本

性においては、この論理的形式の充分な意味において、自己関係は実際には全く実現され得ないということである。何故なら、有限性そのものは、それが止揚される場合に要求されねばならない否定的意味とは別の否定的意味を持っているからである。即ち、有限性そのものは、制限されていることであり、絶対性の排除であるが、止揚は消去である。それ故、有限者は確かに自己自身を止揚するが、しかし実際は否定への全く新しい勢位（Potenz）に基いてそうするのであって、有限者もともかくも絶対者の否定者であるという意味において、自己自身を止揚するのではない。こうして、有限者は確かに否定的に自己と関係しているが、しかし、それ自身の否定的本性の自己関係によって、自己と関係しているのではない。

五　それ故、第五の歩みがなされねばならない。絶対者は確かに、有限者が自己自身を止揚する限りにおいて、有限者と同一化された。しかし、それでもって、絶対者は全体としての有限者とあらゆる点で同一化されたのではない。しかしながら、このような同一化も許されるということは、全一性という一元論の原理が新たに適用されるならば、直接に帰結する。即ち、有限者は絶対者と何ら根本的に異ったものではあり得ない。シェリングは有限者に相対的自立性を与えたが、その理由は、有限者はその場合にのみ自己自身の中で絶対性の性格に一致したからである。この自立性は同時に止揚されねばならなかった。そして、このことは内的にのみ起り得たが故に、ヘーゲルは、絶対者は、有限者の自己自身による否定として、有限者の中に現前しているのだ、と結論した。この考えは、しかし、新たに、従って新しい意味において、有限者は絶対者であり、従って、絶対者もまた有限者であるといわれる場合にのみ、維持される。有限者が凡そ自己自身に対する否定的関係以上の何ものでもない限りにおいて、絶対者は有限者である。

この絶対者と有限者との新たな同一化は、先ず第一に、有限者が自己自身から出て、自己自身を止揚するところの

終りに到るのだという主張に、厳密な意味と同時に、以前よりも遥かに劇的な意味とを与える。絶対者の概念と共に定立される有限者の概念は、今や全く絶対者の自己転倒によって定義されねばならない。絶対者は有限者にあって、有限者を自己転倒へと強いるものではない。絶対者は、有限者がこのような自己自身を止揚するという絶えざる過程に他ならぬ限り、有限者である。

ヘーゲルはこの思弁的な考えを一つの概念形式に盛り込んだが、それはどんな他の概念形式よりも、この考えを表現し、一元論の根本要請に一致する世界の理論へと仕上げるのに適している。その概念形式とは、有限者そのものは自己自身の他者であるというのである。

全一性説の概念の枠の中で、有限者は他者であるといわれる多くの理由がある。そういう訳で、有限者が一者の自立性を表現する限り、有限者は一者の中で相違したものであり、一者に対して相違もしている。このような記述においては、有限者そのものとその他であることとの間には、依然として何らかの区別が堅持されている。しかし、自己自身の他者という概念形式は、有限者を、それがその終りに向うという本質的性質によって考えるだけでなく、有限者が他であることにおいて自己と関係しているということによって定義するべきなのである。

この概念形式はここではその含意や異った表現において分析され得ず、究明されることさえできない。ヘーゲルは、有限性のすべてのカテゴリーは、「自己自身の他者」において「自己自身の」という自己関係と、「他者」という他者関係との形式的関係が相互に統合されている仕方から理解されると思っているし、思わざるを得ない。容易に理解されるのは、どの程度、この考えによって有限者が本質的に過程となったかということであり、また、この過程を動かしているものに属する、自己自身に対する抵抗性は有限者自身の概念から来るのだということである。しかし、

それ以上に理解されることは、絶対者を特徴づける自己関係が、今や有限者自身の否定的本性において表現されているということである。即ち、他者そのものが自己と関係するならば、他者は確かに何らか規定されたものであるか、他者とは異っていなければならぬ、直接的なものである。しかし、他者が直接的なものであるのは、ただ、他者が他者としての自己を自己自身から自己に対して対立せしめるためである。他者が自己自身との関係において本質的に他者である限り、それはまさに規定されたものであり、それとの関係において、他者は自己自身に対して他者である。最後に、このような徹底的に自己関係的な他者性という概念構成のもついくつかの理由からして、有限者の自己止揚がその有限な本性につけ加わるのだということはもはやできない。何故ならば、有限者がそれ自身において示すところの他者性は、まさに、それが自己自身との関係においても持つところの他者性であるからである。他者がそれ自身とは別であるとすれば、それによって他者の原初的な他者性は、他者自身から止揚される。他者の自己関係は他者の自己否定である。

これらすべては、全一論の原理がもう一度適用され、それによって、自己自身を止揚せねばならぬ有限者が、その自己止揚によって定義されたということから帰結する。まさに、絶対者が有限者であるが故に、有限者は自己自身の他者であると考えられることができる。否定的なものそのものが自己関係の中にある。そしてそれ故に、絶対者の自己との同一性は、有限者自身の本質である。この歩みとともに絶対者の概念も再び動き始め、新しい仕方で捉えられねばならないことは明白である。第五段階においては先ず、有限者の中での絶対者の内在性の新しい理解が有限者自身の概念に対して持ついくつかの帰結が展開された。それ故、これ以上の歩みがなされねばならない。

しかし、それに先立って注意されねばならないことは、ヘーゲルの新しい概念形式と共に、彼の哲学体系の形式の

変化もまた可能とされ、それどころか必要とされたということである。初期の体系においても「論理学」は最初の学科であった。かかるものとして、しかし、それは絶対者自身についての学問、即ち形而上学への不可欠な序論に過ぎなかった。絶対者の概念と形式とは、絶対者の中の単に有限なものにこだわる思惟から無理やり取り上げられねばならなかった。この有限者がどの程度、ともかくも止揚され、統一へと連れ戻されているかを理解できたのは、他の思惟のみであった。この思惟は、ヘーゲルが見出すように、一切の有限性の、曖昧ではあるが、現実の根拠である限りにおいてのみ、単なる反省によって尊重される絶対者自身の純粋で確固とした直観の中になければならない。こういう訳で、同時に全一者についての最高の概念に直接に関わらないような、有限者そのものの純粋な認識なるものは存在しないのである。

さてしかし、有限者が、本質的に自己自身から自分自身の有限性を止揚し、しかもその理由が、絶対者がその中にあってそのように有限者に働きかけるからではなくて、有限者が自己自身の他者として、従ってその自己止揚に基いて定義されるからであると考えられるとすると、理論的状況は根本から変る。有限者がそれ自身の概念に従って絶対者へと自己止揚をするならば、この絶対者の概念が把握されるためには、有限者を全くそれだけで——即ち、外的な観点や、絶対者自身から得られねばならぬであろうような尺度なしに、——考えること以上には何も必要ではない。有限者を有限者として考えるならば、既に純粋に考えているのであり、絶対者そのものの「中で」考えているのだといってよい。そして、このことは、この概念が、有限者の自己止揚の故に、絶対者の概念を含意しているということから、そして更に、有限者は、自己自身を止揚する限り、絶対者と同一であるということから理解されるのである。

それ故、「論理学」は有限者のどの任意の概念からでも始めることができる。有限者の有限性は、有限者の概念が

自ら導く自己止揚の故に、この概念の中で明らかになるであろう。有限者の概念が自己自身をその対立物へと止揚し、そしてこの対立物もまた再び有限であるが故に、先ず一組の概念規定が生じなければならず、それはその相互の自己止揚によって、絶対者の中に定立されていることが明らかになる。しかし、この途上で絶対者自身の概念がその完全な規定性において到達されうるという見通しもまた成り立つ。思弁概念的解釈のどのような道を通って、またどのような段階を通って到達されるかは、すぐには見通すことはできないけれども。という訳は、有限者自身は、否定的自己関係における絶対者であるからである。即ち、「有限者の自己止揚」とは、単に、最後に繰り返し有限者の自立性が確認されるような、有限者から有限者への止揚のみを意味しない。有限者の自己止揚は、一切の有限性の絶対者への止揚である。それ故、こうして、有限者の概念は絶対者の概念を単に抽象的にだけではなく、完全な概念として含意しており、しかもその限り、この概念は、その中で一切の有限性が決定的に脱落しているというように考えられねばならないと期待することができる。確かに「論理の学」は、絶対者を思惟するという意図だけでなく、完全であり、どんな有限な概念も単なる前提として放置しないという意図をも持つとすれば、直接的なものという最も単純な概念が、「論理の学」の冒頭に置かれているように配慮することは、当を得ている。しかし、完全であるにせよ、断片であるにせよ、いずれにせよ、「論理の学」は論理学自身として既に形而上学であり、有限な概念の批判的破壊であるだけでなく、有限な概念の自己破壊の絶対的把握でもある。

六　第六の歩みは既に準備されている。そこでは、絶対者そのものの概念が更に展開されるが、それは有限者とその自己止揚とを絶対者と同一化することによって絶対者の概念の中に取り入れられた性質を考慮に入れることによってである。有限者の自己止揚である絶対者はどのように考えられるべきか。

絶対者自身にとって必要なことは、今や、それが既にかかるものとして、それ自身何ら有限なものではないあの絶対者の概念の中に移される有限者であるということである。全一性の定式は今や、自己自身を抹殺する有限者と、それへと有限者が自己を止揚する絶対者との統一を、唯一の絶対者の意味として理解するという変った意味を持つのである。

絶対者の中の有限者は自己自身の他者である。この概念形式は先ず、有限者は他の有限者へと自己を止揚するというように解釈されうる。この有限者もまた更に再び自己自身から止揚され、しかも、最初の有限者へと止揚され返すか、あるいは、もう一つの有限者へと止揚され、この有限者もまた他の有限者へと止揚されるから、有限者の無限の系列が生じ、それらの有限者の各々は二つの隣りを持つことになる。即ち、それからその有限者が出て来る隣りと、それへとその有限者が消える隣りである。自己関係的な他者性のこの二つの解釈のうちのどちらも、全一性の意味を汲み尽すことはできない。何故なら、それらのいずれも有限者を決定的に確証することになるからである。

しかし、自己関係的他者性の他の解釈も到達されることができる。それは、例えば、有限者が、他者である限り、本質的に対立物であるという性質において捉えられることによって可能である。更に、それぞれの有限者の他者への自己止揚だけでなく、一つの概念における相互の止揚を考えるならば、それと共に、仮定されていた相関関係自体の意味も変化する。そうすると、有限者は、何組かの有限者とは相違している限り、自己自身の他者であることができる。しかしそれによって有限者は無差別な統一である。自己関係的な他者性の概念を展開する際に生じる何重もの修正については、それ自身形而上学である論理学だけが、その理由を説明することができる。

それらの修正がすべて展開されるということは、しかしまた、絶対者自身の概念を有限者の自己止揚との関係にお

いてはっきりと捉えることが可能になるための必要な前提では全くない。何故ならば、自己自身の他者という概念は、その解釈の一つにおいて、絶対者の概念と全く一致するからである。このことは、次の仕方で分る。絶対者は、自己自身を止揚する有限者と同一であると考えられた。しかし、有限者の自己止揚は絶対者の概念をすっかり明らかにすることはできなかった。何故ならば、有限者の取るに足りないことの中で絶対者はただ自己を回復するからであり、しかも、有限者が絶対者へと自己を止揚するという仕方で、自己を回復するからである。それとともに、しかし、全一性という一元論の原理の展開のすべての段階からわれわれによく知られているような種類の一つの問題状況が再び現われたのである。即ち、相違したものは、統一とは異るものとして、そして同時にこの統一そのものと考えられねばならないという問題状況が再び現われた。ここでは、今や絶対者は一方では、一切の有限者と、従って、その自己止揚とがその目標に到達するところのものであり、他方では同時にまた、自己止揚の過程にあるこの有限者である。こうして、絶対者は有限者であり、しかもそれとの関係においてはどんな有限者も存立しないところのものである。絶対者そのものも自己自身の他者である。

勿論、絶対者は、有限者がそうであるのと全く同じように自己自身の他者であるのではない。即ち、その他者において静止するものとして、あるいは、そういってよければ、有限者に本質的な他者性に屈伏するものとして、自己自身の他者であるのではない。絶対者は有限者の自己関係的な他者性と同一化されるが、しかし、それは、他者性の自己止揚の過程がそこで終るものであるから、その過程に対立するものとして同時に考えられるというような仕方で、有限者の自己関係的な他者性と同化されるのである。その限りにおいて、絶対者は両方のもの、即ち結果であると同時に過程であり、この意味において、それ自身であると同時に他者である。

絶対者は精神である。この絶対者の簡単明瞭な定義、ヘーゲルが与えることができる最高の定義は、絶対者が、今明らかになった意味において、それ自身であると同時にまた自分の他者でもありうるということは、どのように理解さるべきかという問いから導き出される。絶対者は、必然的に自分の他者の中で自己を失うというような仕方で他者であるようなものではない。このように自己を喪失することなしに、絶対者は本質的に自分の他者に関わっている。しかし、絶対者は、この他者がこの関係において、絶対者に固有のものとして定立されているだけでなく、絶対者と同一のものとして定立されているという仕方で、この他者に関わっているのである。このことは、意味をずらすことによってはあるが、容易に次のようにもいい表わすことができる。即ち、絶対者は、他者において自己自身と関係することによって、自己を他者と関係させる（即ち、他者と関係する）のであると。絶対者が自己を他者と関係させる（即ち、他者と関係する）ということは、絶対者がこの関係において絶対者自身として存立していることを含意している。絶対者が自己自身としての他者と関係しているということは、絶対者が、他者が依然として他者であるということとは無関係に、この他者において、自己自身以外の何者にも関係していないということを意味する。

ヘーゲルは、このような関係は凡そ認識的な関係としてのみ可能であると考える。そしてこのようにして、また、絶対者における他者性が、「絶対者は自己自身としての自分の他者と関係する」という言語的表現を見出す場合に用られねばならない説明的な「としての」が、もっと詳しく理解される。こういう訳で、絶対者は、認識として、しかも自己認識の特殊で最高の形態において考えられる場合にのみ、全一性の要請に従って思惟されうる。これで以ってヘーゲルは認識の思弁的解釈に到達したが、それによれば、認識も形式的対象である。その存在論上の地位においてではなくて、その規定性の具体化の点でのみ、形式的対象は数やカテゴリーとは区別されている。一元論の方法上の

要請に従って、形式的対象は確かに同時に、分析の終りに自立性を持つ、唯一の純粋な形式である。他のすべての形式は、精神の自己関係という形式に含まれたものと考えることができる。

精神としての絶対者は、有限者自身が三つの条件を満すが故に、有限者との同一性において理解されうる。即ち、先ず第一に、有限者は、絶対者そのものをも定義するのと同じ根本規定を示している。という訳は、有限者が他者の自己関係である限り、それは純粋の自己関係であるからである。しかし、有限者は同じ理由からして、自己自身において相違している。なぜなら、有限者は他者性であり、有限者の自己の他者への止揚であるからである、第二に、絶対者自身は自己との関係において他者である。なぜなら、絶対者は有限者であると同時に、一切の有限者を脱落せしめるものであるからである。しかし、絶対者は、有限者がその自己止揚において自己自身の他者であるのと同じ意味で自己自身の他者であるのではないから、第三に、絶対者は、有限者が、それ自身の概念によってのみ規定された過程において絶対者へと変貌する限りにおいてのみ、この有限者と同一化されるのである。

ヘーゲルはこれら三つの根拠づけの形式をすべて要求するが、それらの形式の間の区別や連関を明確にしない。それらの根拠づけの形式は彼にとってはどれも、絶対者を有限者と同一化することを可能にし、この同一化において絶対者そのものを定義されるようにするという本質的なことに終るのである。ついでにいうと、彼は自分の思弁的言語の伝達能力を信頼している。この思弁的言語の凝縮性とその論理的パトスとはまさに、この言語が絶対者の有限者に対する関係の様々の様態を、一つの命題において、従って一息でいい表わすことができるということから説明される。

七　更に最後の歩みがなされねばならない。絶対者は精神であるとの定義へと導いた論証の連鎖は、絶対者の有限者

に対する二重の関係と有限者の自立性という考え方から始まった。この論証の連鎖は、絶対者の有限者に対する否定的関係という概念を展開することによって前進して来た。その際、常に前提されていたのは、絶対者と共に有限者は立ち現われるということである。このことは今や実際、絶対者が、シェリングの理由づけによれば、有限者がそこに「定立されて」いなければならぬ全一性の原理に従って考えられる限り、絶対者の概念の中にあるのである。しかし、絶対者が有限者及びその否定的自己関係と全く同一化された後では、この形式的帰結をもはやそれ以上よく考えないで、引き合いに出すことはできない。精神としての絶対者は、それがあるところの、そして、そういうものとして絶対者が自己を捉えることができるところの有限者を含まなければならない。絶対者は、それどころかこの自己の有限性という形式において、自己自身を前提しなければならない。なぜなら、絶対者が精神であるならば、その認識的自己関係においてのみそうなのであり、認識的自己関係は、精神において絶対者自身として捉えられる他者がある限りにおいてのみ、成り立つことができる。それでは、精神としての絶対者の概念にとって、それが有限者とその否定的自己関係を前提するということは、どのような意味を持つか。絶対者の概念は、その他者がそれと既に関係しており、他者の自己止揚の過程に入っている限りにおいてのみ、自己としての自己と関係することができる。絶対者はどのようにして　このように媒介されずに有限者から始めることができるのか。有限者は既に絶対者と同一化されたけれども、このことは更に問われねばならない。なぜなら、精神は、今や自己自身をその端初において有限性として持つからである。しかし、精神はすべてに先立って、全一性であるところの統一性である筈である。

答えは、絶対者は精神であるという主張の意味がなお更に展開されることによってのみ、生じることができる。次のように論究するならば、明らかに依然として充分に根拠を以って思惟していないのである。即ち、自己自身を把握

するということが、精神に本質的であるとすれば、まず第一に、自己を把握するもの、精神が自己をそういうものとして把握するところのものが現実的でなければならないと。そして、精神が自己を自己との距離においてのみ、そして自己同一化によって、捉えるとすれば、このような同一化を可能にするものも、従って有限者もまた現実的でなければならないと。

この論証においては、しかし、両者、即ち、精神の存在と有限者の存在とは、精神の自己認識として現実的になるものの可能性の必要条件であると捉えられている。けれども、それによって、絶対者と、従って、凡そ存在する一切とは精神に他ならぬという言明は、既に根拠を持たなくなっている。何故なら、この言明が意味を持つのは、有限者が媒介されておらず、自己止揚の過程に入っているということが、絶対者は精神であるという定義の中に入っていて、精神の可能性の必要条件として単に要請されるのではない場合のみであるからである。

精神は認識する自己関係である。精神そのものが絶対者であるならば、その自己関係は、その理解が可能であるために、その自己関係にとってなお外的な諸条件が仮定されなければならないというように考えることはできない。このこともまた再び、全一性の原理から直接に出て来る要請である。絶対者が精神として考えられるならば、それは、媒介されない有限性として始まり、この有限性の認識的自己関係への自己止揚において、どこまでも自己自身と同一である、ある過程の論理的形式として、そう考えられるのである。

このような論理的形式は、（すべての尤もらしいものとは一見全く相違しているけれども、）間違った方向に考えられていないということが最も容易に示されるのは、精神とその自己認識の概念の中に、多くの人々にとって、そして確かにヘーゲルにとっても、自己意識の概念にとって根本的なこと、即ち、自己意識は単に現われるのではなくて作

り出されるのだということが、持ち込まれる場合である。自己自身にかかわるもの以外の他のものからは、自己意識は由来しないし、そのようなものによっては生ぜしめられることはない。自己意識は自己自身から始まらねばならない。自己意識がそうする限りは、しかし、それはまだ自己を自己自身として理解することを成り立たせている関係にはない。にも拘らず、この始まりは自己意識そのものの一部である。もし、自己自身から自己自身へ来るということがなければ、自己自身についてのこのような意識もないであろう。

それ故、絶対者が全く精神であり、単に精神的であるだけでなく、それに先立って、あるいはその上に更に他であるとすれば、この精神は、自己自身から始まって自己自身へと向い、自己自身を自己自身として捉えるに到る自己意識のように考えられねばならない。自己意識は自己をそのように捉えることによって、自己をそれ自体完結したものとして捉えるのである。そしてまさにそのことによって、精神は、自己自身を止揚し、それによって自己自身を変える、媒介されない有限者における自分自身の発端をも、単にあるもの自体としてだけでなく、（精神自身だけが直接性の状態にあるけれども、）精神自身があるところのものとして理解するのである。しかし、直接性の状態は、精神がそういうものとして考えられるものの中で必然的であり、そういうものの中で最初のものとして必然的である。

精神としての絶対者の概念へと導く歩みのつながりの初めにおいては、絶対者は有限者に対して二重の関係にあった。即ち、有限者を定立する関係と、有限者を止揚するという否定的な関係にあった。先ず、否定的な関係は全一性の要請の下で、有限者に内在的な関係になった。最後に、今や明らかなことは、この原理から引き出されることができ、また引き出されねばならぬいくつかの帰結の一つは、有限者一般を定立する、絶対者の有限者に対する他の関係は、それが相違したものの関係を含むという意味においては、なくてもよいものだという帰結である。絶対者がある

限り、有限者はあり、そして絶対者は、この有限者自身としてあるのである。このことは、しかし、ただ絶対者は、精神である限り、自己自身から始まって精神の自己認識に到らねばならぬということを意味する。このことは、更に、絶対者自身も、初めはただ有限者としてのみ存在するということ、しかし、この有限者は自己自身に対する否定的な関係から考えられ、その限り、一方では絶対者自身であり、他方では、自分の完全に規定された自己関係に入ることであり、その限り、全一者である精神の中での過程であると同時に、全一者である精神に向う過程であることを意味する。

こうして、また明らかなことは、一方では、有限者を自己関係的にし、有限者を自己自身の他者であると考えるヘーゲルの概念形式と、他方では、絶対者は精神であるとするヘーゲルの定義とは切り離し難く連関しているということである。この連関が、全一性という一元論の根本概念の下でのみ明らかになり、そしてそれはまた、この概念を形式的に展開する場合にのみ明らかになりうるということは重要である。

全一性の思想は、パルメニデスによって、思想の世界にもたらされた。その思想は西欧の伝統全体を惑乱したが、しかも、その思想がはっきりといい表わされず、個物から成る現実の世界を解釈するのに役立たないが故に、全く別の基礎づけの思想を呼び起し、それがこの思想に反対の論証をすることによって、自分自身を説得的にした場合でも、西欧の伝統全体を惑乱したのである。この思想がどのようにしたら現実の世界の解釈に取り入れられることができるかを近世において示そうとしたのは、スピノザとシェリングであった。しかし、その思想が、絶対者は精神であるという定義において、絶対者は全一者であるという最も簡単な表現の中に置かれていたプログラムを完成するのだということ、このことはヘーゲルの洞察であった。このようにして、ヘーゲルの論理学が、結局、実際、彼の精神の哲学

から、なぜ切り離すことができないのかという根拠が理解される。しかし、それはいくつかの論理的な根拠に基いて理解されるのであって、心的なものや、まして社会的なものの何らかの事態を理論的に記述しようという欲求を考慮することによって理解されるのではない。更に、ヘーゲルの方法を使用して、しかも同時に体系の思弁的基礎を斥けようとする思惟の試みは、なぜどれも、理論的に根拠のない状況に導くのかということが理解される。この方法のパラドクシカルな概念形式は、全一論の一元論的要請の下でのみ合理的にコントロールされるのである。就中、ヘーゲルが、なぜ後に誰の目にも傲慢であると思われた考えや要求、即ち、彼の思惟はその形式と完結性によって形而上学の大きな伝統の中のすべての先行する体系に真理性の点で優れているという考えや要求を単にもて遊んだだけではないのかが理解される。彼がそこからむしろこの自分の根拠が全く確実であると知ることができた立場と観点とが再び到達されたのである。

訳者あとがき　ここに訳出したのは、昭和五十四年四月四日、大阪大学文学部主催で大阪ドイツ文化センターで行われた、ハイデルベルク大学のディーター・ヘンリッヒ教授の講演『精神の他者性と絶対性』(Andersheit und Absolutheit des Geistes. Sieben Schritte auf dem Wege von Schelling zu Hegel)である。講演に先立って同教授から渡された講演原稿に基いて訳出した。講演の際、省略された部分（原文で二ページ位）も、訳出した。本誌への訳稿掲載を許可されたヘンリッヒ教授の御好意に感謝する次第である。

（訳者　神戸女学院大学教授）